

日本も元気にする青年海外協力隊

世界を
元気にした人は、
日本も
元気にできる!

vol.2

その経験を、日本の未来に。

青年海外協力隊として開発途上国の課題解決に取り組み、帰国した人の数がもうすぐ4万人に達しようとしています。

彼らは2年間にわたる開発途上国でのボランティア活動を通して、異なる文化や生活、価値観に触れながら、広い視野や豊かなコミュニケーション能力、課題解決力を磨いてきました。

青年海外協力隊としての活動は、赴いた国のためだけでなく、
隊員一人ひとりの人間としての成長にもつながっています。

さらに、その経験は、日本の地域社会にとっても貴重な財産です。

このパンフレットでは、隊員の皆さんが赴任先の国々でどんな活動をし、
そこで得た経験を帰国後にどんなカタチで生かしているのかをご紹介します。

これから青年海外協力隊を志す皆さんも、
帰国後のことまで視野に入れて参加することで、
海外での2年間はきっとそれ以上の価値を持つはずです。

世界を元気にした人は、日本も元気にできる。

さあ、あなたも参加してみませんか。

世界の国々のために、あなた自身のために。

そして、私たちの国と地域社会のために。



石川県金沢市
小学校 栄養教諭 P.8
井上 奈緒さん



栃木県宇都宮市
営農指導員 P.6
高橋 昭博さん



島根県大田市 P.12
わかな農園 経営
生越 大地さん



奈良県奈良市 P.10
救急隊員
竹内 綾子さん



宮崎県児湯郡都農町 P.14
都農ワイン 工場長
小畑 暁さん



北海道北見市 P.4
小学校教諭
田川 満男さん



日本の子どもたちにも、 ガーナで感じた“生きる強さ”を。

たがわ みつお
田川 満男 北見市立東相内小学校 教諭

現職教員特別参加制度を利用し、2008年6月から小学校教諭として西アフリカのガーナで活動。2010年4月からは、参加前に教鞭をとっていた北見市立東相内小学校に復職し、授業で開発途上国の子どもたちの様子を伝えながら「生きる力」の向上を図っている。

自分の実体験を子どもたちに伝えたい。

小学校の授業で子どもたちに世界の国々のことを教える時、田川さんは多少のとまどいを覚えていた。「聞きかじりの知識を生徒に教えるのではなく、自分自身の経験を子どもたちに伝えたい。」と青年海外協力隊に応募した。そして年齢制限ギリギリの39歳でガーナへと向かったのだった。

授業は工夫して「見せる」。

小学校教諭として派遣された田川さん。「ガーナでは、実験を見たこともなければやったこともない教師が多い。だから子どもたちも実験をしたことはありません。少しでも興味を持ってもらうために、実験で『見せる授業』を工夫しました。」現地で調達できる、ビニール



小さな熱気球を作った実験の授業

とアルミホイル、ろうそくで小さな熱気球を作り、暖められた気体が上に昇る様子を見せたとき、新鮮な驚きが教室に満ちた。そして自身も、教える喜びとやりがいを感じたのだった。

ガーナの子どもたちから元気をもらう。

バイクに乗って小学校を巡回する際、時には、道なき道を行き、橋なき川を渡らなければならないこともあった。だがその時に手助けをしてくれたのは子どもたちだ。「小さな小舟に率先してバイクを乗せてくれました。彼らにとって支え合うことは当たり前のことなんです。」手伝いをいとわず、いつも生き生きとした笑顔を浮かべているガーナの子どもたち。「TVやゲームなどの娯楽がない分、自分で一から楽しいことを作り出している。だから良い笑顔をするのだと気づきました。」ガーナの子どもたちから、元気の源をもらったのだった。



田川さんと暮らガーナの子どもたち

世界を
元気に
した人



小学校を巡回して理科の実験をみせると、
子どもたちは素直に驚き、喜んでくれました。
私がガーナで出会ったのは、
貧しい暮らしの中でもキラキラ輝いている
子どもたちの満面の笑顔でした。

日本も
元気に
する人



日本の子どもたちはガーナよりも
もしかしたら厳しい環境にいるのかもしれない。
ガーナの子どもたちが持っていた生きる力と、
心の底から湧き出る笑顔を持って欲しいから
私の経験を子どもたちに伝えたいです。

日本の子どもたちにも輝きを。

1年9ヶ月の任期中に50校の小学校を巡回し、元気な子どもたちと接してきた田川さん。いざ日本の小学校に戻って見て感じたのは、日本の子どもたちを取り巻く環境の複雑さだ。「物は何でも揃っているけれど、子ども自身では解決できない問題がたくさんあるように思いました。」生徒を、ガーナの子どもたちのような生き生きとした元気な姿にしたい、その思いが沸々とわいてきた。

自分で考えることが大事。

「日本の子どもは、何でも自分優先。他人のことを考えられない子が多いです。しかも考えること自体を面倒に思う子までいる。」と田川さんは憂慮する。だから授業で心掛けているのは、自分で考える場面をたくさん作ることだ。「自分の頭で考え、一生懸命チャレンジするからこそ満足感が得られる。それを授業の中でつかんで欲しい。」それはガーナで教わったことだ。そしてそのためにはガーナ



活気ある授業風景

で行った「見せる授業」が多いに役立つ。「授業で身につけたことは目に見えないけれど、彼らの記憶に残って、いつか何かがあった時に役に立ってくれば」と願ってやまない。

「勝つため」から「成長のため」に。

地域活動の一環として行っている子どもたちへの剣道の指導にも変化が生まれた。これまでは勝ちにこだわっていたが、子どもたちの成長が一番と思えるようになった。帰国してから剣道を教え始めた子どもたちが、今度初めての試合を迎える。「ちゃんと試合になるのかな？」と笑う田川さん自身が、人として教師として一回りも二回りも大きくなったように感じている。



子どもたちへの剣道の指導

教育委員会に聞く



北見市教育委員会
渡部 眞一 学校教育部長

人間関係を築く力は人一倍。

現地では、仕事はもちろん人間関係も一から築く必要があると聞いています。言葉が通じない中で、信頼を得るのは非常に大変だったと思います。でもそれが今、生徒や保護者と良好な関係を築く上で大きな力になっているのではないのでしょうか。

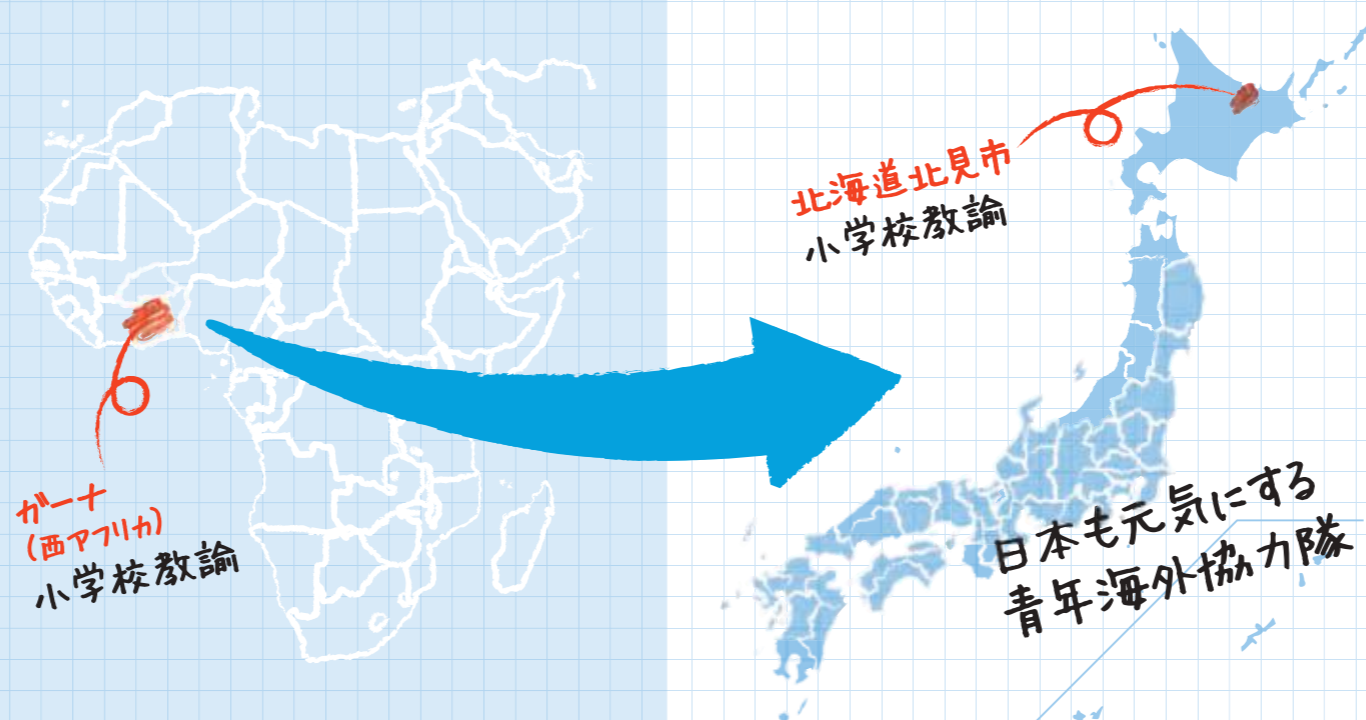
校長先生に聞く



北見市立東相内小学校
校長 安藤 信 先生

協力隊仕込みの行動力は、さすが。

協力隊で活動する中で培ったのでしょうか、田川先生は、こうと決めたことはすぐに動く実行力があります。問題が起こっても小手先でかわすのではなく、心と心で勝負して解決につなげる。それが子どもたちや保護者にも伝わっていますね。非常に頼もしい存在の先生です。



外から日本を見たことで、 “もったいない”に気づいた。

たかはし あきひろ
高橋 昭博 宇都宮農業協同組合 営農部 園芸指導課 営農指導員

1998年～2000年まで、タイで農業協同組合の組織づくり・事業開発に携わる。帰国後は、宇都宮農業協同組合に再就職し、規格外野菜の有効活用のためのシステム構築等に尽力。現在は野菜生産農家への営農指導にあたるほか、野菜の専門家として日アセアンパートナーシップ強化事業にも関わっている。

マイナスからのスタートに途方に暮れる。

宇都宮農業協同組合を退職し、タイのスコータイに向かった高橋さん。「農業協同組合の事業を活性化させたい」という現地の要望に即した派遣だったが、着任してみると、事業を行う以前の組織作りから行わなければならない状態だった。途方に暮れながらも高橋さんは農家の現状調査に着手する。だが言葉の壁に阻まれ難航。62kgあった体重はみるみる49kgまで減り、「帰国」という言葉も頭をよぎった。だが「ここで帰ったら一生後悔する！」グッと腹に力を入れ、負けん気に火をつけた。

“助けたい”思いから、現状打破。

半年後には、言葉も理解できるようになり調査は着々と進んだ。そして就学年齢にも関わらず貧しさで学校に行けない女の子たちの存在を知る。「手に職をつけてあげたい。」そこで市内のパン屋店主を口説いて講師を頼み、農協にオープンを設置して10数人の女の子を集め、農協婦人部の活動を立ち上げた。その後、販売収益で3人が高校へ進学、3人が技術を身につけてパン屋に就職することが叶った。



研修でパン作りを学ぶ女の子

動き出した、農業協同組合。

次に着手したのは米の卸し事業だ。ブローカーによって米の価格が不当に設定されていることに気づいた高橋さんは、農家にも公平に利益を上げてもらうと農協主導での米の販売を目指した。精米機を農協に設置してパッキングを施し、さらに地元のスーパーに交渉して、直販にこぎつけた。収益が上がり、農家に小規模ながら融資を行うことができるようになった。そして高橋さんが着任した時はたった8人だった組合員は増え続け、3年後には360人にまで達したのだった。



現地の農業協同組合の方たち

農家に聞く！



トマト生産農家
稲川 悟さん

問題を打開するためのキーパーソン！

彼は農家の収益がどうしたら上がるかを常に考えてくれます。そういう活動を協力隊でしてきたから自然にできるんでしょうね。今、日本の農業は全般的に閉塞状態にあるけれど、それを活性化させてくれると期待しています。

世界を
元気に
した人



現地の言葉がまったくわからない、
事情がつかめない、でも期待はされている
という中で、プレッシャーにつぶされそうに
なりました。でもいつ何かを成し遂げたことが、
次のステップにつながりました。

日本も
元気に
する人



日本からも農協からも一端離れ、
外から見ることで新しい視点を持つことが
できました。今後もアンテナを高くして、
農家の人にどんどん情報を還元し、生産者の
収益につなげていきたいと思っています。



規格外野菜を有効活用。

帰国後、再び宇都宮農業協同組合に就職した高橋さんは、規格外野菜がJAうつのみや管内で、年間240トンも発生し、その処理に120万円の費用がかかっていることに目を向ける。わずかなキズや見劣りのために市場に出せず廃棄されている野菜。「もったいない」という思いが拭いきれなかった。そこで規格外野菜を使い、加工業者と協力して野菜ピューレや濃縮エキスを製造。使用した地元飲食店からは「輸入物に比べ、安心して使えて味も良い」と好評価を得た。「タイの貧しい農村での隊員生活がなかったら、自分だって廃棄することに何も感じなかったでしょう。農協を辞め、国外に出たからこそ他の人が気づかない視点を持つことができた。」そう高橋さんは考えている。



製造したピューレを使用したパスタ

仕事に熱意を持つことを忘れない。

現在は主に、野菜の生産農家への技術の普及や栽培・経営指導等に携わっている。「安心・安全」な野菜に対する需要が高まる中で、安全な農産物を栽培していることを証明する第三者認証の「JGAP」を、トマトの生産農家としては全国で初めて、宇都宮農業協同組合の農家が取得したが、これに尽力したのは高橋さんだ。また若手生産者たちと、オレンジや紫、黄色のカラフルなミディトマトの生産にも取り組む。「何かやろうと持ちかけると、広い視野で指導してくれる。高橋さんと仕事をするようになってから、トマトを作ること、売ることがおもしろくなった。」と生産者の一人は話す。「与えられた仕事をこなすのではなく、自ら働きかけられるようになったのは協力隊での経験があったから。熱意を持って事に当たれば必ず伝わることは開発途上国でも日本でも同じ。」と、高橋さんは、今も協力隊で培った熱意と誠意を持って仕事にあたっている。



生産者に説明する高橋さん

上司に聞く！



宇都宮農業協同組合
営農部 園芸指導課 審議役
加藤 一美 課長

さらに成長して、JAをひっぱる存在に。

上から目線で指導するのではなく、農家と同じ立場に立って物を捉えようとする姿勢は協力隊時代に得たものでしょう。農家からは厚い信頼を得ています。今後はさらに産地からの情報発信に尽力して行って欲しいですね。

食べることの大切さを、 日本の子どもたちにもきちんと伝えたい。

井上 奈緒 いのうえ なお 金沢市立三馬小学校 栄養教諭

2002年12月から2年間、栄養士隊員として青年海外協力隊に現職参加し、西アフリカのブルキナファソで活動。帰国後は、複数の小学校勤務を経て、2009年より金沢市立三馬小学校にて栄養教諭として着任し、給食管理とともに「食育」の授業も担当している。

栄養士としてやるべき、大切なことを探して。

「栄養士として教えるべき、もっと大事なことがあるんじゃないか。給食の食べ残しを見て、ふとそう思ったんです。」それが、小学校の学校栄養士をしていた井上さんが協力隊に参加するきっかけとなった。世界の食事情に触れることで、自分の言葉で食べることの大切さを伝えられるようになりたかったのだ。彼女の赴任先は西アフリカ、ブルキナファソ。ここの栄養失調児センターでは、運び込まれる子どもの約1割が亡くなっていた。それは食料不足だけでなく、母親の食事の与え方に問題があった。栄養バランスが全く考えられていなかったのだ。



離乳食を食べさせる井上さん

異国の地で、自分にできることが見つかった。

「センターに来るのは、治療が必要な重度の栄養失調児でした。だから自分にできることはあまりないんです。だったら、できるのは予防であり、再発させないことかな、と。」センターにいただけでは解決できない。そう感じた井上さんは、現地の村で母親たちを集め、講習会をして回るようになる。村では公用語のフランス語はほとんど通じない。彼女は紙芝居を作り、村の中で食材を持ち寄って、離乳食の作り方から衛生管理まで、現地語を駆使して根気強く指導していった。やがて人が集まるようになり、母親同士の話し合いも広がっていく。自分のやるべきことを見つけるまでの悶々とした日々が、充実した毎日に変わった。



紙芝居を使った村での講習会

視野を広げてくれた、2年間の協力隊体験。

「最初の1年くらいは大変でしたが、巡回を始めてからは、必要とされていることを実感できました。」村の人から質問してくるようになり、信頼関係も深まっていった。同時に、井上さんも現地の考え方や習慣を受け入れられるようになっていった。「日本では考えられないようなことも、それもありがたく思えるようになったんです。」現地のタンパク源である、毛虫や羽アリも食べられるようになった。ブルキナファソでの2年間は、村の人たちだけでなく、彼女自身の視野も大きく広がっていた。



現地の人たちとのふれあい

世界を
元気に
した人



ブルキナファソの栄養失調児センターで、
また村を巡回しながら、子どもたちのケアや
栄養指導を行って来ました。
知識を伝えるだけでなく、人の命に関わる
活動を肌で実感できた2年間でした。

日本も
元気に
する人



帰国後は、食生活の大切さを日本の
子どもたちにもっときちんと伝えていきたいと
思うようになりました。言葉のなかなか
通じない国での経験は、人に伝えるための
いろんな工夫に役立っています。

食生活の大切さを、日本の子どもにも教えたい。

「みんなで食べるとか、分け合うとか、食事の躰は向こうの方がちゃんとしていたと思うんです。」帰国後、復帰した井上さんは、食生活の大切さを日本の子どもたちにきちんと伝えたいと感じていた。箸の持ち方なども、以前は学校で教えることに疑問を持つこともあったが、ためらわず教えるようになった。「村のおばさんが近所の子を注意していたように、教えらるる大人が教えないと。」地域全体で子どもを育てていく。ブルキナファソでの経験は、彼女の教育の視点も変化させていた。



給食の盛り付けや配膳を指導

人に伝えるための工夫を、学校の授業にも。

言葉の通じない国での体験は、教え方も変えた。「伝えるためにどうすればいいか、食欲に考えるようになりましたね。担任の先生と話し合ったり、教材にひと工夫してみたり。」実際、彼女の食育の授業は楽しい。ブルキナファソでの紙芝居と同様、アイデアのある



自作の教材を使った授業

自作の教材に子どもたちは興味津々だ。担任の先生との息もぴったり。他の先生の領域に入り過ぎず、協調しながら授業を進めていくというやり方も、協力隊として現地の人たちと関わる中で得た経験だ。

国境を越えて、日本とアフリカの架け橋に。

三馬小学校では、約20年前からアフリカに古着や文房具を送る活動を続けている。彼女の縁で、ブルキナファソにも物資を送るようになった。児童にも確実にボランティア精神が受け継がれている。「いつかまた、ブルキナファソで活動したいですね。」と語る井上さん。彼女の目標は国境を越えて、まだまだ大きく広がっている。

校長先生に聞く!



金沢市立三馬小学校
校長 島津 健一 先生

井上先生を通して、グローバルな視点を。

飽食の時代の今、世界の現状を見てきた井上先生が生言葉で「食」の大切さを伝えてくれるのは、子どもたちにも、私自身にもたいへん新鮮でした。世界を意識した人格形成をしていくうえで、井上先生はとても心強い存在です。人と人との関係に垣根をつくらぬのも、きっと協力隊での経験が生きているんでしょうね。



マラウイでの経験が、 命の現場に立つ決意をくれた。

たけうち あやこ
竹内 綾子 奈良市消防局 中央消防署 救急隊員

大阪教育大学を卒業し府立高校で保健体育の講師を務めたあと、2004年～06年まで青年海外協力隊員として南部アフリカのマラウイで小中学校を巡回し体育や応急手当の普及活動を行う。帰国後すぐに奈良市消防局に採用され、救急隊員として命の現場に立つ。

自分にしかできない活動を立ち上げる。

大阪の高校で保健体育の講師をしていた経験を活かし、南部アフリカのマラウイへ、学校体育の充実を目指して赴任した竹内さん。日本の文部科学省にあたる国立教育研究所で働きたしたが、同僚からの協力がなかなか得られず、当初は事務処理ばかり。現場指導が全くできない状態だった。だが「誰がやっても同じ活動ではなく、私だからできる活動をしなれば」と一念発起。自ら、地域住民に向けたスポーツイベントを立ち上げた。木の棒を使った綱引きや二人三脚などを教え、身近な物を使って体を動かす



現地の人たちのスポーツイベント

楽しさや協力して何かを成し遂げる大切さを伝えたほか、同僚たちとともに小学校の校庭に廃棄タイヤを再利用した跳び箱を作るなど、運動器具を整備していった。

現地に合わせ「体育」にプラス「健康」を。

運動を通じて、ルールを守ることや、仲間と協力し合って目標を達成する楽しさを現地の人に理解してもらった竹内さんは、次第に「健康」に留意した指導も行っていくようになる。マラウイでは病気や怪我をしてもすぐに医者に見せることができないからだ。そこで、怪我のリスクが減る準備体操の仕方や、心肺蘇生法、現地の事情に即した止血や骨折に対する応急処置の仕方なども教えていった。日本で救急法の講習会を受講していた経験が、マラウイで役立ったのだった。



命を救う応急処置の授業

小さくはかない命を目の当たりに。

世界最貧国のひとつであり、医療後進国であるマラウイ。その悲劇が身近で起きた。彼女が住む家の裏に住んでいた7歳の男の子が突然マラリアで亡くなったのだ。朝、元気に学校に行ったのに、昼に具合が悪くなり、夕方には息を引き取るというあっけなさだった。「もし設備が整った病院で見てもらうことができていたら、死ぬことはなかったかもしれない。」そう呟いた彼の祖母の言葉が忘れられなかった。



現地の子どもたちに愛された竹内さん

「命の重さは同じはずなのに、医療の差で命が簡単に失われるのを目の当たりにしてショックでした。」竹内さんの心に悔しさがあふれていった。

世界を
元気に
した人



日本で「体育は教育です。他人を思いやること、協力してひとつのことを成し得ることなど、学ぶことはたくさんあります。マラウイの人にはそれにプラスαとして「健康」のことも知ってもらおうと「健康教育」もしました。

日本も
元気に
する人



マラウイで、体育から保健や健康へと携わる分野が変わっていき、それと同時に、自分の想いも変わっていきました。この協力隊での経験を生かしたい、そう思ったとき、帰国後の選択肢は救急隊員になることでした。

命と向き合うため、救急隊員に。

マラウイで男の子の死に直面した竹内さんの心に芽生えたのは「命の現場に立ちたい」という思いだった。救急隊員になることを決意した竹内さんは、帰国後すぐに、奈良市の救急隊員の試験を受けて見事合格する。救急の現場は肉体的にかなりハードで24時間体制の仕事だ。就寝中であろうと要請があればすぐに出勤しなければならない。それでも「協力隊を経験してどんな生活環境にも対応できるようになっていたので大丈夫。」と竹内さんは笑顔をみせる。

自分の「役割」を常に考える。

救急隊員になって常に意識しているのは、自分の立場や役割を理解して現場に立つことだ。「相手は老若男女さまざまで、状況もいろいろです。例えば女性の患者さんの場合は、女性の隊員である私の方が症状を聞きやすいこともある。その場の状況を即座に見



日々の念入りな点検

極めることが的確な処置につながります。」相手の状態を鑑みてコミュニケーションを取ることは、協力隊で日々経験してきたことだ。その経験が今も竹内さんに力を与えている。

新たな目標に向かって。

現在所属する中央消防署は、奈良市内で最も救急車の出動件数が多い。忙しい日々を送る竹内さんだが、救急隊員の今より高度で専門的な処置を施すことのできる救急救命士の国家資格取得を新たな目標として、日夜勤務に励んでいる。「女性救急救命士のパイオニアとなり、私はこの世界でずっと働いていきたいんです。」マラウイでの経験を胸に、竹内さんはこれからも命の現場に立ち続ける。



いつでも出勤できる態勢に準備

上司に聞く!



奈良市消防局中央消防署
中山 秀樹 消防司令補

弱音を吐かない精神力の強さがある。

2年間一緒に勤務してきましたが、これまで一度も弱音を聞いた記憶がありません。男でも音をあげるような体力的に厳しい現場でも、絶対に言わない。これも協力隊で培った根性のなせる技なのだろうと思っています。



日本も元気にする
青年海外協力隊

奈良県奈良市
救急隊員

日本の農業の素晴らしさを、 次の世代に引き継いでいきたい。

おごし たいち
生越 大地 わなか農園 経営

島根県大田市の農家に生まれ、大学農学部を卒業後、島根県の農業改良普及員、農業大学校技師と、一貫して農業に関わり続けてきた。2000年から2年半、中国で果樹園の栽培管理指導を行う。帰国後は両親の農業を引き継ぎ、稲作やイチゴ栽培に従事している。

海外の土地で、自分自身を試してみたい。

学生時代に初めて知った青年海外協力隊。自分とは無縁だと思っていた生越さんが参加を決めたのは、実家の農業を継いで自営する覚悟を固めた時だった。「このまま農家として地域の一員になる前に、自分を試したかったんです。」生越さんは県の農業改良普及員を退職、果樹園の栽培管理指導という立場で中国の北京へ赴く。北京とはいえ、市街地からは離れたリンゴ園しかない場所。



果樹園で作られたオリジナルリンゴ

活動の場となる中日友好観光果樹園は、日本の先端技術も導入されていたものの、現場には枝の切り方など基本的な技術が十分に定着しておらず、病害が深刻な状態だった。

大きかった言葉の壁、歴史の壁。

さらに大きな問題は、現場での話し合いがなく、すべてがトップダウンの指示で動いていることだった。しかし、中国ではそれが普通であり、解決するのは困難に思えた。そして赴任3ヵ月目、まだ中国語での柔らかい表現ができないまま、園長に果樹園の改善点を指摘する。結果、園長とはその後1年、口もきけない関係に。「言葉の壁は大きかったですね。歴史問題でのトラブルもありましたが、言葉以前に知らない事実が多過ぎて何も言い返せなかった。」生越さんは日中の歴史に関する本を読み、バスケットや卓球で作業員たちとの距離を縮めていった。



作業員たちとの交流

信頼関係を築ければ、どんな壁も越えられる。

常に作業員とともに汗を流し、現場の意見を園長に上げた。上層部で行っていたイベントも全員参加で企画、上下間の交流を図った。また、一人ひとりに責任範囲を設け、「樹」に愛着を持てるよう働きかけた。作業員たちの仕事への意識が、徐々に変わっていく。そして1年半が過ぎる頃、それまでの活動レポートを園長に提出。生越さんの熱意が、園長との間の雪を解かし始める。

「言葉や歴史の壁はあっても、信頼関係を築ければ思いは伝わるんですね。」やがて生越さんは園長から、作業員たちとのパイプ役として副園長という役職を任される。園長とは、今でも連絡を取り合う関係だ。



果樹園のメンバーとの送別会

世界を元気にした人



中国でのリンゴ栽培を通して感じた、
人と人とのつながりの大切さ。
いろんな壁にもぶつかりましたが、
信頼関係を築けば乗り越えられることを
身をもって経験することができました。

日本も元気にする人



日本の農業が代々受け継いできた技術を、
まずは自分のものにしたいですね。
たくさんの人との交流の中で、
いろんなヒントをもらいながら
毎日の試行錯誤を楽しんでいます。

外に出て知った、日本農業の素晴らしさ。

生越さんには、忘れられない言葉がある。「残り30年もあるんじゃない、あと30回しかない。」協力隊に参加する前、30代のある農家の人に言われ、将来を決定付けた一言だ。「一年一作を無駄にはできない。」そんな気持ちが日本の農業を支えていることを、生越さんは海外の農業に触れることで知った。「日本の農業のすごさを感じることができました。何事にも愛着を持てるのが、日本人なんですね。」帰国後の生越さんに迷いはなかった。

新たな信頼関係を、日本でも。

現在、生越さんは両親から農業を引き継ぎ、「わなか農園」を経営する。ワナカとは、ニュージーランドを自転車旅行したときに訪れた町。人と自然の共存に感銘を受けた場所だ。そこに「和(循環・ネットワーク)の中」という想いを込めた。名前のとおり、ここにはさまざまな人が集まってくる。幼稚園の稲作体験や、収穫米での



両親から引き継いだ農園

おにぎりパーティ。さらに、農業を志望する人への研修を行ったり、協力隊経験者が集まって演奏会を開いたり。中国で、信頼関係を築くことの大切さを痛感した生越さん。この農園にはいつも、明るい声が絶えない。

積み重ねてきたものを、次の世代へ。

日本の果樹栽培では、実よりも「樹」に愛着を持つのだと言う。樹を育てることで、甘く美しい実をつけ続けるからだ。中国でも指導してきた、積み重ねることの大切さを今、生越さんはあらためて実感する。畜産農家と連携し、牛糞を堆肥として、稲ワラを飼料として提供しあう、資源活用の試みも動き始めた。「新しい技術や信頼関係を、次の世代に引き継いでいきたいですね。」「わなか農園」の輪は、これからますます広がっていくことだろう。



土からこだわったイチゴ栽培

グループ農家に聞く!



農業グループ「アグリスマイル」古志 康博さん

経験を引き継ぐ、後継者の育成に期待。

楽しい農業、幸せな農業の実践者ですね。新しい農家の輪も広がりつつあります。行政とのつきあい方が上手いのも、協力隊での経験が生きているんでしょう。彼の背中を見て、視野の広い後継者が育ってくれるのを期待しています。



協力隊で培った“ものづくり”の情熱で、 世界が認めるワインを作りたい。

おばた さとる
小畑 暁 都農ワイン 工場長

北海道旭川生まれ。1985年から3年間、農畜産物加工の技師として南米のポリビアで活動。帰国後、九州の飲料メーカーに入社し、92～95年にかけてブラジルの現地法人ワイン工場へ。96年、都農ワイン工場長に就任。2003年、2006年には英国で出版されたワイン年刊で世界のワイン百選に選定される。

電気も水道もない村で、ゼロからのスタート。

北海道生まれの、大陸的な性格が協力隊での活動を支えたのかもしれない。小畑さんが赴任したのは、南米のポリビア。電気も水道もない、ジャングルに囲まれた数軒の農家があるだけの小さな集落だった。その農業技術研究所で、農畜産物加工の指導を行うのが彼の役割だ。「研究所だし、勉強しに行くようなつもりだったんです。ところが行ってみると机がなくて。」ほとんどゼロからの協力隊活動が始まった。



ジャングルに囲まれた村

好奇心ともものづくりの情熱が、パワーになった。

大学院の恩師に勧められて参加した協力隊。漠然とした活動内容はイメージしていたが、それを始められる状態ではなかった。「最初はどうかと思いました。でも、焦ることはなかったですね。何もかもが好奇心の対象で面白かった。」苦しい状況をもパワーにしてしまう持ち前の性格、技術屋としてのものづくりの情熱が沸々と騒ぎ出す。そこで目を付けたのが、ここで穫れるオレンジを使ったジャム作りだった。現地では非常に交通事情が悪いので、いくら収穫しても出荷しきれずその大半を腐らせていたのだ。「とりあえず、鍋と釜さえあればできるんじゃないか」そんな単純な発想からのスタートだった。



村の人たちとのジャム作り

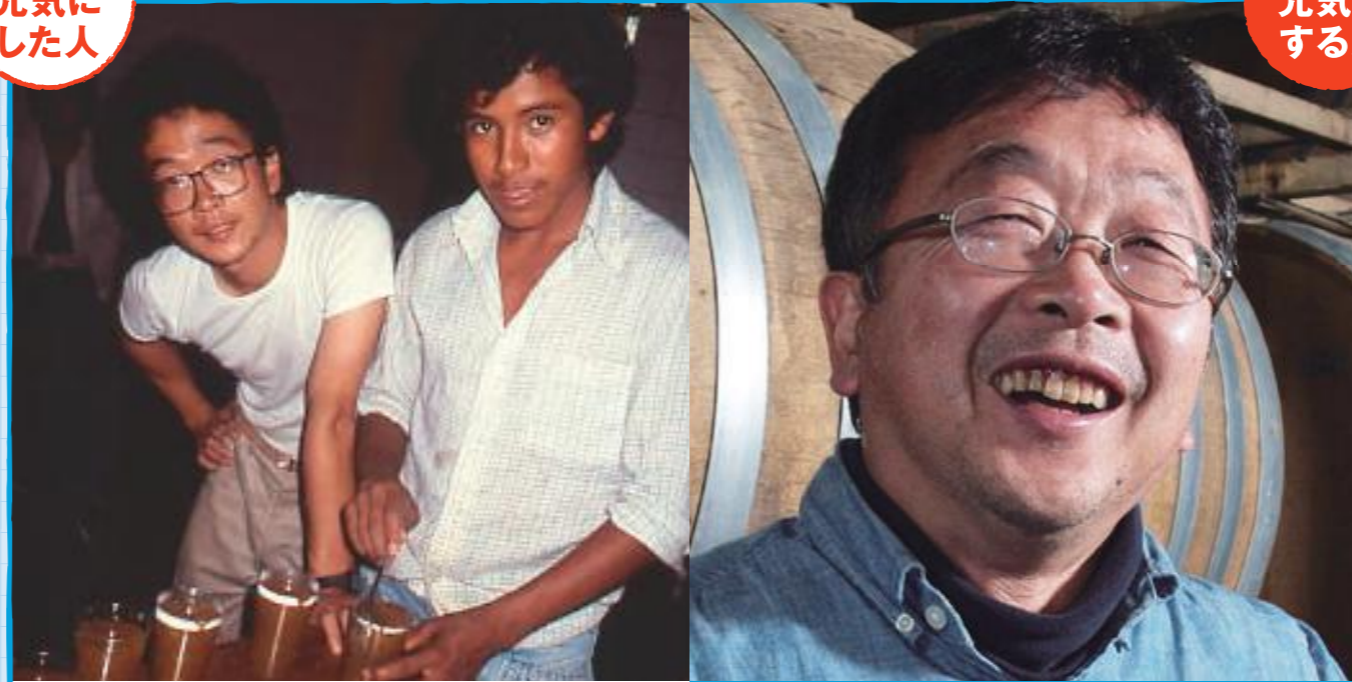
3年間の活動で生まれた、村人との絆。

ジャム作りにとりかかるまでに1年、本格化する頃にはすでに2年の任期が終わろうとしていた。しかしそのとき、思いがけぬことが起きた。村の人たちが、任期をあと1年延長させてくれと訴えてくれたのだ。「うれしかったですね。大変だったけど、村の人たちにはとてもいい思いをさせてもらいました。」その頃には、彼は村の相談役的な存在になっていた。そして、いよいよ帰国の時。空港には、ともにジャムを作った仲間たちの予期せぬ姿があった。村から空港の街までは、1泊2日かかる距離だ。お互いに涙で顔をくしゃくしゃにしながらの別れだった。



3年間過ごした村での送別会

世界を
元気に
した人



日本も
元気に
する人

全く何もないところから始まった
ポリビアでのゼロからのジャム作り。
数軒の農家しかないジャングルの村で、
まずはひとつひとつ、約束を誠実に守ることから
信頼関係を築いていきました。

協力隊で培ったものづくりへの情熱が、
ワインと出会ってまた燃え始めたんです。
地元でできるものを生かして、
世界に通用するワインを作りたい。
その思いが徐々にカタチになってきています。

ジャム作りで培った経験を、ワイン作りに。

帰国後、小畑さんはたまたま見つけた九州の大手飲料メーカーに就職。国内での研修を経て、92年からブラジル現地法人のワイン工場に支配人として赴任する。「品質が悪く、赤字続きだったブラジルでの現状を見て、僕がやらないとダメだと思ったんです。」再び南米の地で、協力隊で培ったものづくりの血が騒ぎ始めたのだ。ワイン作りに手応えを感じた3年間、そこで将来の目標が定まった。

誠実さが、農家との関係を変えた。

ブラジルから帰国した小畑さんは、世界に通用するワイン作りを目指して宮崎の都農ワインへ。協力隊での経験から、地域の特性を生かしたものづくりに彼はこだわった。地元のブドウ農家とも、真正面から激しくぶつかり合った。決してブドウ栽培に恵まれていない土地で、少しでも上質なワインを作るためだ。そして2003年と2006年、



自ワインの品質をチェック

都農ワインは世界的に有名なワイン年刊「世界のワイン百選」に選ばれる。ポリビアで貫き通した、決してウソをつかない、約束を守るといった誠実なポリシーは、ここでも農家との距離を縮め、堅い信頼関係を築いていった。

自分の好奇心と、直感を信じて。

北海道に育ち、ポリビアでジャムを作り、ブラジルでワインと出会い、九州でワイン作りに情熱を燃やす。一見、波瀾万丈な人生にも思えるが、小畑さんは至って平然と語る。「好奇心と直感を頼りに、自分のやりたいことを自由にやっていたら今に辿り着いたんです。」これから協力隊に参加する人たちにも、自分の直感を信じてほしいという。「そこに何か必ずあります。それを信じて、まず一步を踏み出してください。」



樽のワインを試飲する小畑さん

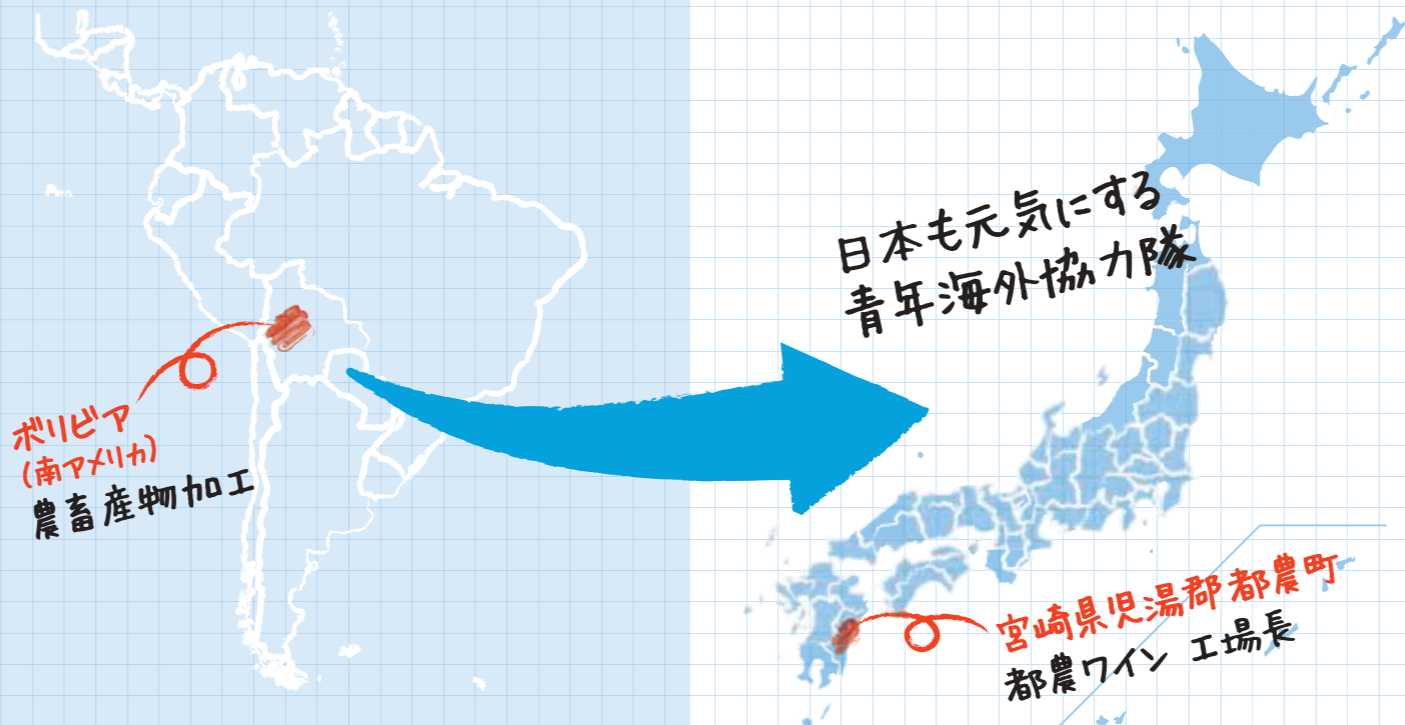
パートナーに聞く!

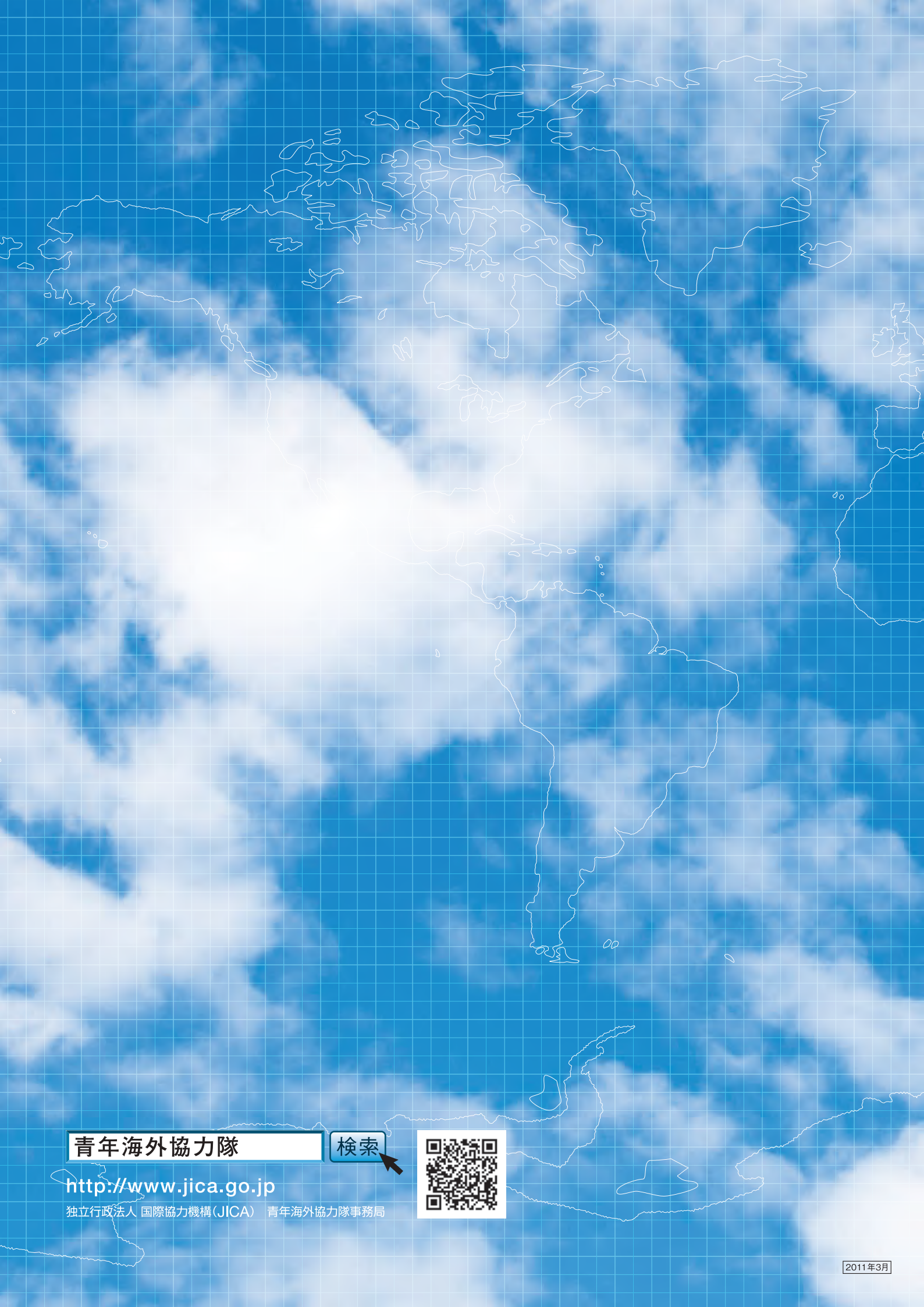


都農ワイン
赤尾 誠二 工場長代理

海外で得た経験を、若い人たちにも。

外に出ると学ぶことがたくさんある。そんな思いから、僕も海外研修などですごくいい経験をさせてもらっています。とにかく、ものづくりには妥協しない人ですね。僕にとっては大嫌いな上司であり、大好きな上司であり。それがいつも交互にあって刺激的なんです。





青年海外協力隊

検索

<http://www.jica.go.jp>

独立行政法人 国際協力機構(JICA) 青年海外協力隊事務局

